

氏名(本(国)籍)	倉地卓将(神奈川県)		
主指導教員氏名	東京農工大学 准教授 佐藤俊幸		
学位の種類	博士(獣医学)		
学位記番号	獣医博甲第499号		
学位授与年月日	平成30年3月13日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
研究科及び専攻	連合獣医学研究科 獣医学専攻		
研究指導を受けた大学	東京農工大学		
学位論文題目	日本における犬の不安行動に影響する要因の研究		
審査委員	主査	東京農工大学 教授	渡辺 元
	副査	帯広畜産大学 教授	小川 晴子
	副査	岩手大学 教授	佐藤 れえ子
	副査	東京農工大学 准教授	佐藤 俊幸
	副査	岐阜大学 教授	志水 泰武

学位論文の内容の要旨

近年、飼い主と伴侶動物の関係の改善が重要視されている。特に、伴侶動物の問題行動の予防と治療が重要となるが、日本では研究が始まったばかりである。問題行動の中でも、過剰な不安が原因となって発現する不安障害を示す犬は多いと考えられる。そこで、本研究では犬の飼い主に対するアンケート調査を日本各地で大規模に行い、不安行動の発現に関わる要因を日本で初めて解析した。

第1章では、不安障害に発展する可能性がある犬の不安行動について日本各地での発生状況の実態を調査した。その結果、怖がりな犬の割合はどの地域でも50%を超えること、それにより困っている飼い主の割合も40%を超え、東京では47.4%に達することを明らかにした。また、不安行動について相談したいと考えている飼い主は56.5%もいるが、問題行動を専門とする獣医師の存在を知っている飼い主の割合は21.4%しかないこと、そのような獣医師がいれば相談したいという飼い主の割合は56.1%に達することも明らかになった。不安行動を示す状況に関しては、「分離不安」は入手経路の影響を有意に受けていること、老齢個体は若齢個体より「嵐」や「花火」で不安行動を示す割合が有意に高いことなどが明らかとなった。したがって、問題行動により来院した犬の問診時に年齢や入手経路を訪ねることで、ある程度診断の方向性を決められる可能性があることが示唆される。以上のことから、問題行動の知識を有する獣医師が増えることで、問題行動の予防のために飼い主を啓発することが可能となることが期待される。

第2章では、犬の不安行動の発現に対する経験的・環境的要因として、パピークラスやトレーニング教室への参加、同居犬・飼い主の子供の存在の影響を調査した。その結果、トレーニング教室への参加によって「嵐」「花火」に対して不安行動を示す割合が有意に減少することが明らかになった。また、「花火」に対する不安行動は第1章の結果同様、有意に年齢の影響を受けていた。すなわち、「若齢」、「成齢」及び「老齢」は、「幼齢」

よりも「花火」で不安行動を示す割合が有意に高かった。トレーニング教室に参加することで犬の不安行動の発現が減少することが明らかとなった。一方、第1章で認められた「嵐」に対する不安行動に関して年齢による影響は検出されなかった。また、攻撃行動と不安障害に関しては、トレーニングやパピークラス、同居している犬や子供の存在が、異なる影響を与えることが示唆された。問題行動により必要となる予防方法が異なる可能性を考慮した調査が今後必要となると思われる。

第3章では、犬の不安行動の発現に対するトレーニング教室への参加期間や頻度、回数、参加時の犬の年齢、復習の有無などの影響を調査し、トレーニング教室に通う最適なスケジュールについて検討した。その結果、怖がりである犬は怖がりでない犬に比べ通い始めた年齢が有意に高いこと、分離不安においても不安行動を示す犬は示さない犬と比べ通い始めた年齢が有意に高いことが明らかとなった。以上のことから、トレーニング教室に通い始める年齢を考慮することで、より効果的に不安行動の発現を抑えられることが示唆された。一方で、第2章で確認された「嵐」「花火」に対する不安行動に関しては、いずれの項目においても有意な影響を及ぼす要因は検出されなかった。これらに関しては、トレーニングに参加すること自体に「嵐」「花火」による不安行動の発現に対する予防効果があることが示唆された。もしそうであれば、頻度や回数に関わらず最低限のトレーニングを行うことでも問題行動発現の予防につながる可能性がある。今後はオペラント条件付けの正の強化以外についても不安行動の発現に対する影響を調査し、正の強化との比較を行うことも必要となるかもしれない。

本研究は日本における問題行動の実態と発現に影響している要因を調査した初めての研究である。本研究により日本における不安行動を示しやすい犬の割合や、イヌの行動に困っている飼い主の割合が無視できないほど高いことが初めて明らかとなった。また、問題行動を専門とする獣医師の認知度は低いが、そのような獣医師がいれば相談したいと思っている飼い主は二人に一人存在することも分かった。犬の不安行動の発現に入手経路や年齢が影響していること、トレーニング教室への参加は不安行動発現の予防につながることで、通い始めた年齢が低いほど効果が高いことも明らかとなった。犬の問題行動に関する研究は発展途上の分野であるが、本研究は問題行動の発現に悩む飼い主を救うための先駆的研究となると思われる。

審 査 結 果 の 要 旨

本研究は日本における問題行動の実態と発現に影響している要因を調査した初めての研究である。本研究では犬の飼い主に対するアンケート調査を日本各地で大規模に行い、不安行動の発現に関わる要因を日本で初めて解析した。最新の統計解析手法を適切に用いており、その点でも評価できる。

本研究により日本における不安行動を示しやすい犬の割合や、イヌの行動に困っている飼い主の割合が無視できないほど高いことが初めて明らかとなったことは高く評価できる。また、問題行動を専門とする獣医師の認知度は低いが、そのような獣医師がいれば相談したいと思っている飼い主は50%以上存在することも明らかにした。このことは問題行動に関して十分な知識と経験を要する獣医師の育成が必要であることを客観的に示しており、高く評価できる。問題行動の知識を有する獣医師が増えることで、問題行動の予防のために飼い主を啓発することが可能となることが期待される。

犬の不安行動の発現に入手経路や年齢が影響していることを明らかにした点も評価できる。問題行動により来院した犬の問診時に年齢や入手経路を訪ねることで、ある程度診断の方向性を決められる可能性を示した。

攻撃行動と不安障害に関しては、トレーニングやパピークラス、同居している犬や子供の存在が、異なる影響を与えることを示唆した点も評価できる。問題行動により必要となる予防方法が異なる可能性を示唆している。

犬の不安行動の発現に対するトレーニング教室への参加状況の影響を調査し、トレーニング教室に通う最適なスケジュールについて検討した点も大いに評価できる。トレーニング教室への参加は不安行動発現の予防につながることで、通い始めた年齢が低いほど効果が高いことも明らかにした。トレーニングに参加すること自体に「嵐」や「花火」による不安行動の発現に対する予防効果があることを示唆した点は高く評価できる。これらの成果は今後の問題行動発現の予防に関する指針を与える可能性があり、動物福祉、人と動物の関係改善に関わる研究として非常に優れている。

近年、飼い主と伴侶動物の関係の改善が重要視されている。特に、伴侶動物の問題行動の予防と治療が重要となるが、日本では研究が始まったばかりである。犬の問題行動に関する研究は発展途上の分野であるが、本研究は問題行動の発現に悩む飼い主を救うための先駆的研究となると思われる。

以上について、審査委員全員一致で本論文が岐阜大学大学院連合獣医学研究科の学位論文として十分価値があると認めた。

基礎となる学術論文

- 1) 題 目 : Dogs predisposed to anxiety disorders and related factors in Japan
著 者 名 : Kurachi, T., Irimajiri, M., Mizuta, Y. and Satoh, T.
学術雑誌名 : Applied Animal Behavior Science
巻・号・頁・発行年 : 196 : 69-75, 2017

既発表学術論文

- 1) 題 目 : Saliva collection by using filter paper for measuring cortisol levels in dogs
著 者 名 : Oyama, D., Hyodo, M., Doi, H., Kurachi, T., Takata, M., Koyama, S., Satoh, T. and Watanabe, G.
学術雑誌名 : Domestic Animal Endocrinology
巻・号・頁・発行年 : 46 : 20-25, 2014
- 2) 題 目 : Resource partitioning based on body size contributes to the species diversity of wood-boring beetles and arboreal nesting ants
著 者 名 : Satoh, T., Yoshida, T., Koyama, S., Yamagami, A., Takata, M., Doi, H., Kurachi, T., Hayashi, S., Hirobe, T. and Hata, Y.
学術雑誌名 : Insect Conservation and Diversity
巻・号・頁・発行年 : 9 (1) : 4-12, 2016
- 3) 題 目 : Flower-visiting butterflies avoid predatory stimuli and larger resident butterflies: testing in a butterfly pavilion
著 者 名 : Fukano, Y., Tanaka, Y., Farkhary, S. I. and Kurachi, T.
学術雑誌名 : PLOS ONE
巻・号・頁・発行年 : 11 (11) : e0166365, 2016